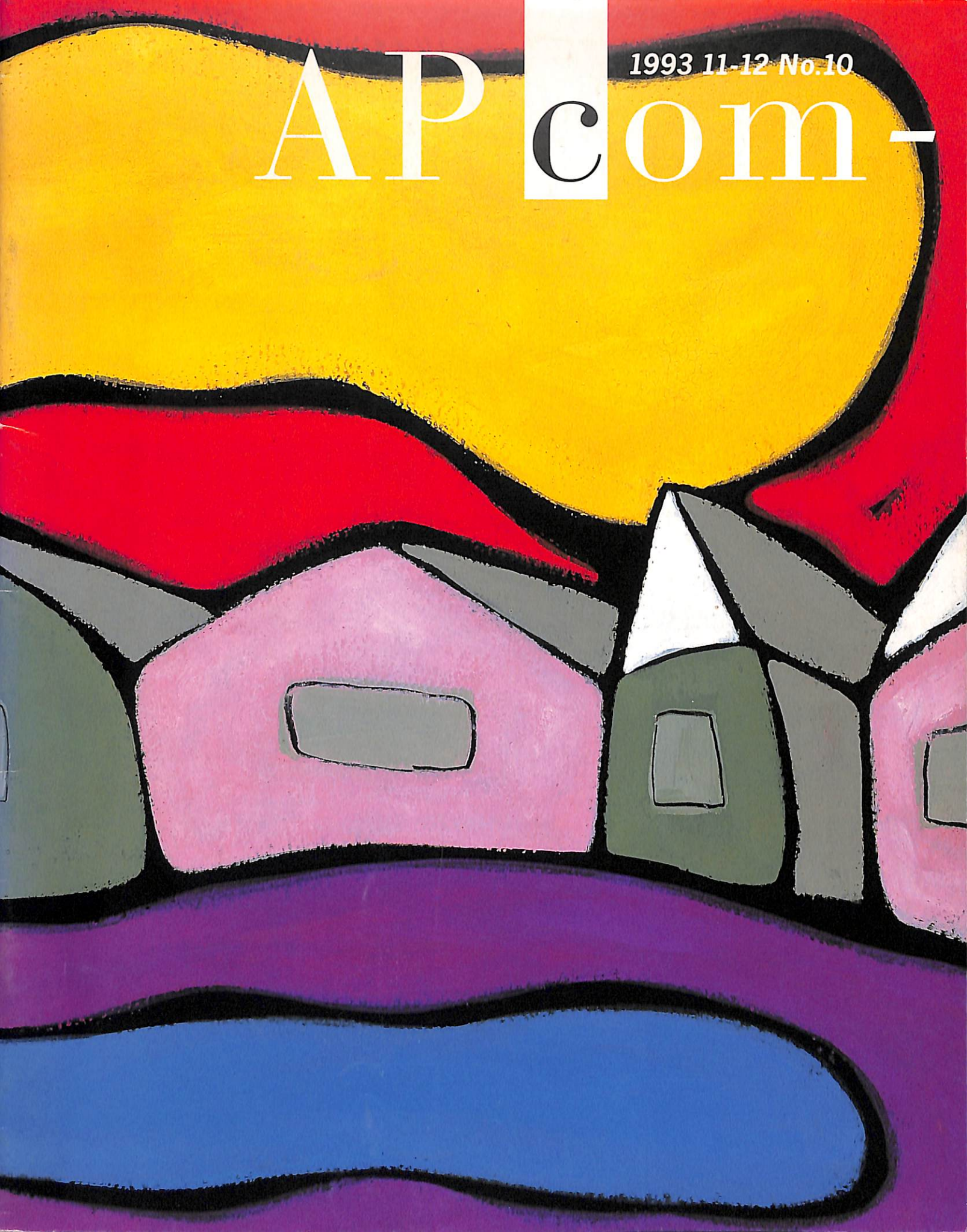
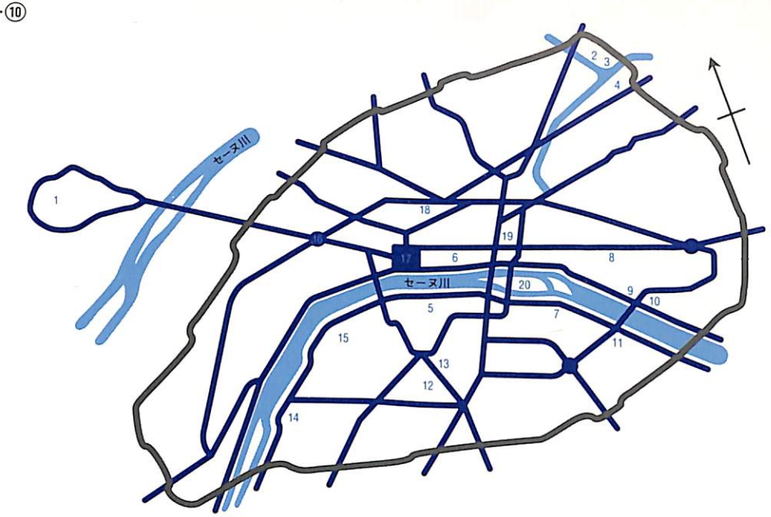
APcom-

1993 11-12 No.10





都市再生の物語

「パリは変わる!」……19世紀後半、オスマンのパリ大改造をまのあたりにして、詩人ボードレールはこう叫んだ。
生まれ変わったヨーロッパの帝都パリに輝かしい未来を見たのだ。
あれから100年あまり。パリは再び大きな変貌を遂げようとしている。
グラン・プロジェ(大規模計画)と呼ばれる、都市再生のための建設計画が
市内各地で進められ、まち中に活気があふれはじめたのだ。
停滞ムード漂うヨーロッパ諸国のなかから、いちはやく甦ったパリ。
今号は、新生パリの顔をレポートする。

写真:普後均　文:編集部

1. グラン・アルシュ(新凱旋門)
2. 科学産業都市
3. ヴィレット公園
4. 音楽都市
5. オルセー美術館
6. グラン・ルーブル
7. アラブ世界研究所
8. バスティーユの新オペラ座
9. 大蔵省新庁舎
10. オムニ・スポーツ
11. フランス大図書館
12. コロン
13. モンパルナス・タワー
14. シトロエン・パーク
15. エッフェル塔
16. エトワール(旧凱旋門)
17. コンコルド広場
18. 旧オペラ座
19. ポンピドゥーセンター
20. ノートルダム寺院

CONTENTS

1
AP com-REPORT
世界の建築文化を訪ねて⑩
パリ／都市再生の物語

15
パリのグラン・プロジェを知るキーワード

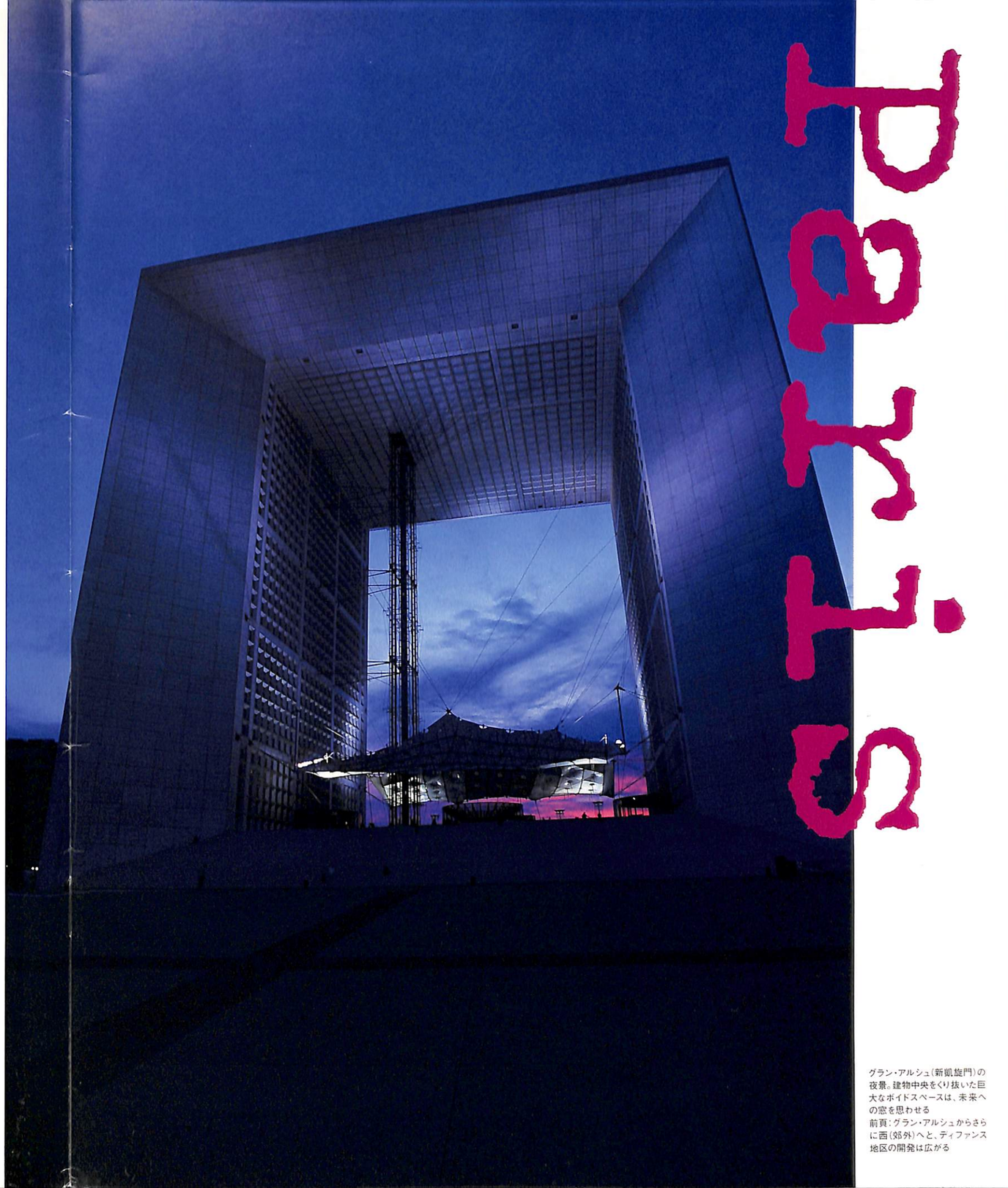
17
AP com-AREA STUDY
販売店のあるまち⑩
千葉・千葉市 株式会社建材丸宇

21
AP com-FORUM
ARCHITECTURE VIEW UP
VEILED HOUSE べえ小児科
ホテル Twinkle
妙蓮寺の家

25
INFORMATION
YKK AP PRESENTATION '93
建築デザイン会議 '93 IN TOKYO

AP com-11、12月号 No.10
発行:YKKアーキテクチュラル
プロダクツ株式会社
〒130東京都墨田区亀沢3丁目22番1号
YKK R&Dセンター
tel.03-5610-8166 fax.03-5610-8167
編集:AP com-編集室
印刷:株式会社日刊スポーツ印刷社
発行日:1993年11月20日

制作協力:株式会社 I&S
株式会社アルシーヴ社
AD:伊丹友広
デザイン・レイアウト:イットイズデザイン
表紙イラストレーション:冨沢天

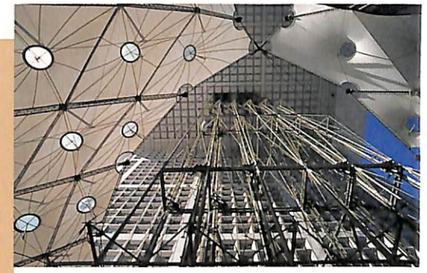


グラン・アルシュ(新凱旋門)の夜景。建物中央をくり抜いた巨大なボイドスペースは、未来への窓を思わせる
前頁:グラン・アルシュからさらに西(郊外)へと、ティファンス地区の開発は広がる

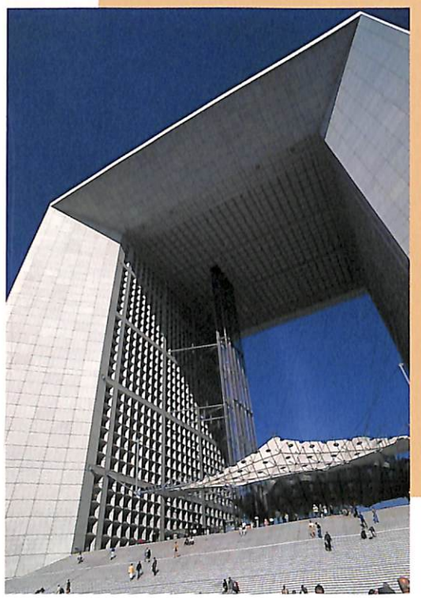
Grande Arche

未来への窓

新生パリの象徴…その筆頭に挙げられるのがディファンス地区にそびえ立つ
グラン・アルシュ（新凱旋門）だ。フランス革命200周年の1989年に完成、
同時にパリ・サミット（先進国首脳会議）がここで開催され、
テレビニュースを通してパリ再生の雄姿が全世界にアピールされた。
巨大な窓のように、中央がすっぽりとくり抜かれた立方体の建物。
あまりにもシンプルで単純明快な形態。しかしここには、
一連のグラン・プロジェに共通する、都市再生に賭けたしかけが隠されている。



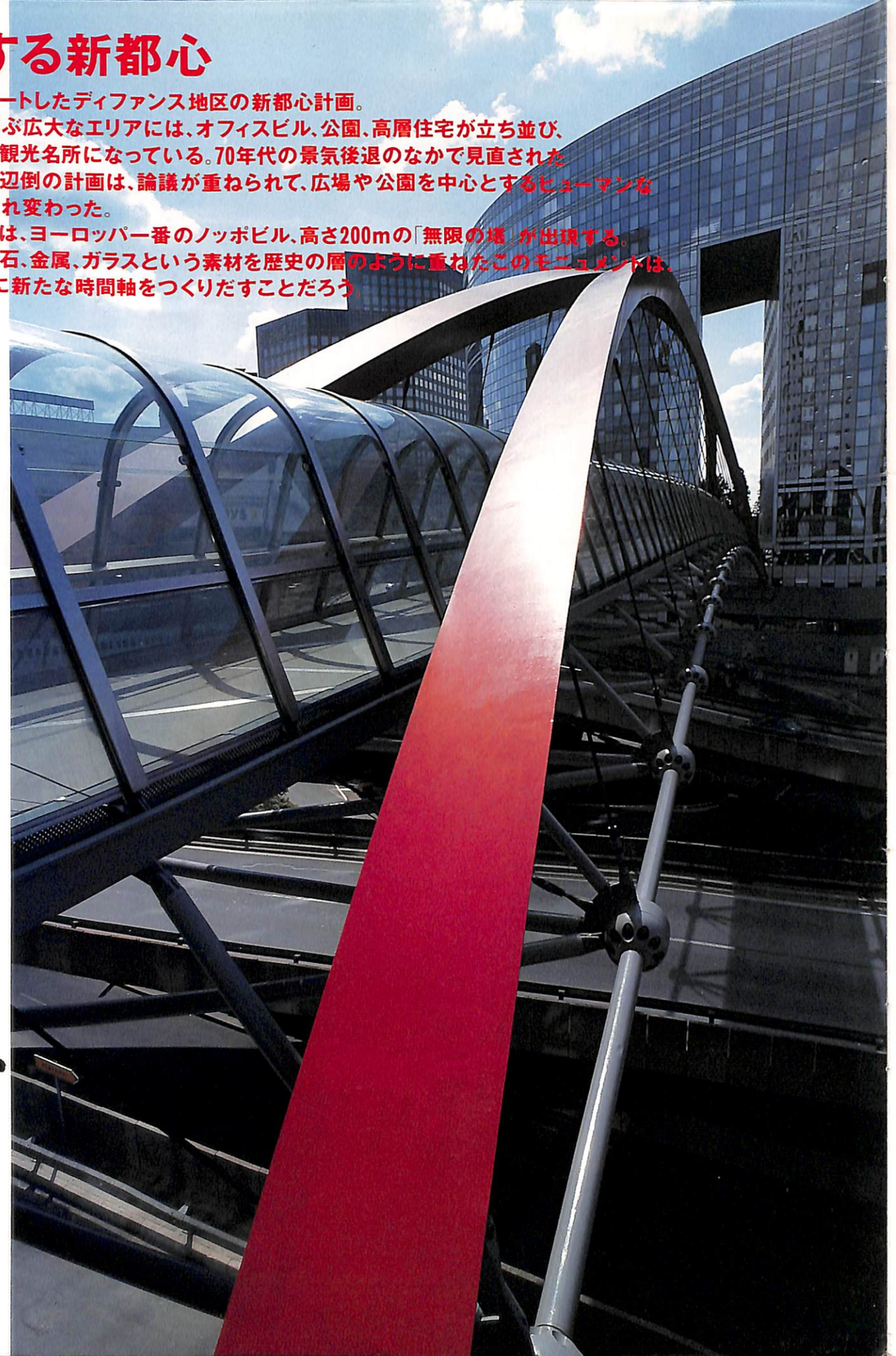
新凱旋門はパリの北西部、新都心として開発されたディファンス地区にそびえ立っている。
写真で見ると、フォルムが単純なだけに、平面的な印象を受けるが、実際に現場で見ると、そのボリューム感は圧倒的なものだ。縦、横、高さ、ともに一辺105m。ちょうど35階建てビルの高さに相当する巨大なキューブが、しかも穴あき状態で建っているのだから。
ボイドスペース（中空）がつくる窓はあまりにも大きい。この前に立つと、視線は知らず知らずのうちに、西へとのびるハイウェイの先、郊外へ吸い寄せられ、今度は逆に、背後のパリ市内をふり返りたくなる。すると、そこに、あっと息をのむような光景が展開するのだ。新凱旋門の建つ場所から市内へと一直線に道路がのび、その先にナポレオンが建てたエトワール（旧凱旋門）が分身のように建っている…！
エトワールの先にはシャンゼリゼ通り、コンコルド広場、そしてルーブル宮殿へと、見事なパースペクティブが広がっている。18世紀から今世紀に至る、パリの歴史的建造物が一直線に並ぶ通りに交差して、このグラン・アルシュは建てられているのだ。ここではじめて納得することになる。この建物はパリの歴史的な都市軸を考慮したうえで建てられているのだということが。
設計は、1983年の国際コンペで424案のなかから選ばれた、デンマークの建築家ヨハン・オットー・フォン・シュプレッケルセン。
「開かれた立方体／世界への窓／未来につながる道への最終関門／それは現代の凱旋門／人類の勝利を祝うための／それは未来へのシンボル」と、その設計思想をきわめて簡潔に語っているように、彼はエトワールへの対置としてこの中空の立方体をデザインしたのだ。
しかし、ただこれだけのことなら、誰でもが考えるだろう。シュプレッケルセンは、ただ単にふたつの凱旋門を向き合わせただけでなく、そこにまるで暗号のようなしかけを施したのだ。まず、立方体の一辺105mという数字はエトワールの高さの2倍であり、中空のボイドスペースの幅はシャンゼリゼの道幅と同じなのだ。そしてもうひとつ、グラン・アルシュをパリのこの都市軸と6度振って建てている（だから広場から見ると、正面が少し左を向いている）。これはルーブル宮殿が、都市軸と6度ブレていることからの引用なのだ。
まるで謎をふんでいるかのような数字合わせ。方角占いのような符牒。フランス人が好みそうなウィットだが、彼はあくまでも、パリという都市の伝統に敬意をはらい、歴史的軸線がもつ意味を熟知したうえでデザインしたのだという。
立方体という単純明快な純粋形態をとりながら、そこに過去の遺産の尺度（105m、シャンゼリゼの幅）やブレ（6度）を積極的に援用することで、過去と連続する都市空間をつくりだそうとしたのである。



左：1辺105mの壁面は、21m間隔×5スパンの構造フレームを並べることで、
エキスパンション・ジョイントなしでつくられている
右上：パイプは、展望エレベーターのガイドライン。屋根にあたる部分でパリ・サミットが開催された。
白いテントは「雲」と呼ばれる風雨よけ
右上から2番目：グラン・アルシュの前の公園からは、つねに旧凱旋門が見渡せる演出になっている
右上から3番目：グラン・アルシュ周辺は、パリの新しい観光スポットになった
下左：正面部分は白い大理石、側面はガラスとアルミフレーム仕上げ
下右：屋上から見たパリ市内。パリの都市軸、旧凱旋門がよくわかる
前頁：エレベーターからパリ市内を見る。一直線に延びるパリの都市軸のはるか向こうに、
エトワール（旧凱旋門）が建っている

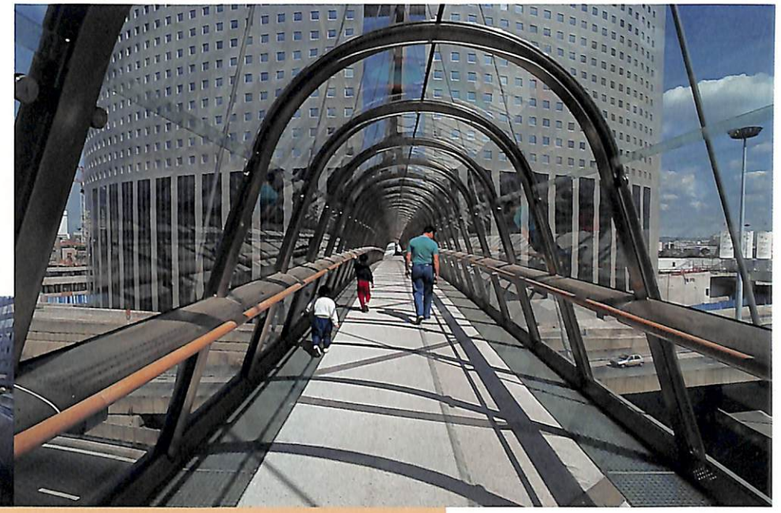
成熟する新都心

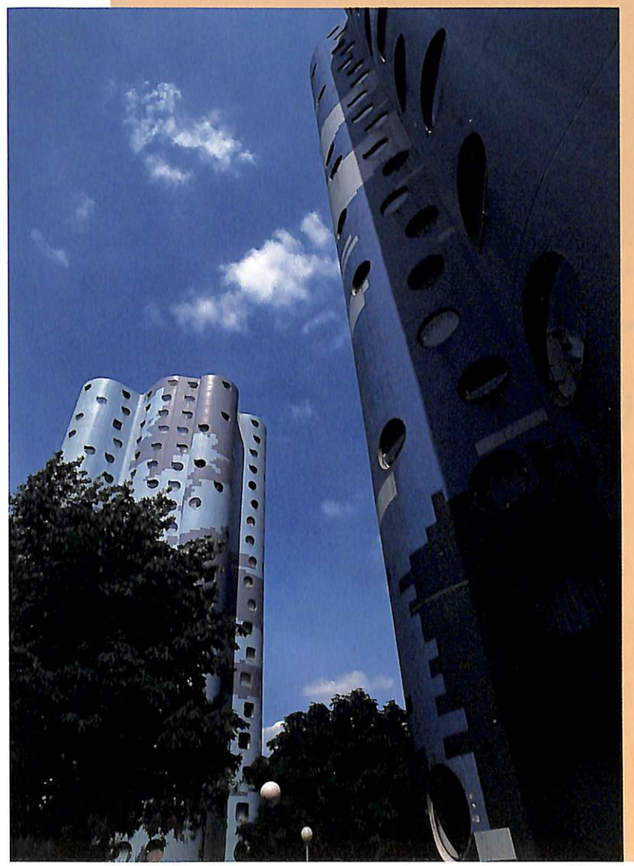
1958年にスタートしたディファンス地区の新都心計画。
220haにおよぶ広大なエリアには、オフィスビル、公園、高層住宅が立ち並び、
パリの新しい観光名所になっている。70年代の景気後退のなかで見直された
モダニズム一辺倒の計画は、論議が重ねられて、広場や公園を中心とするヒューマンな
新都心に生まれ変わった。
やがてここには、ヨーロッパ一番のノッポビル、高さ200mの「無限の塔」が出現する。
下層から順に石、金属、ガラスという素材を歴史の層のように重ねたこのモニュメントは、
ディファンスに新たな時間軸をつくりだすことだろう。

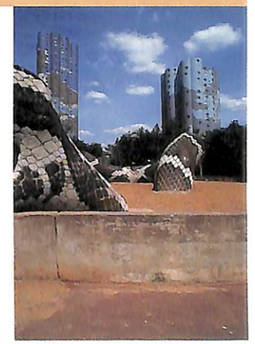


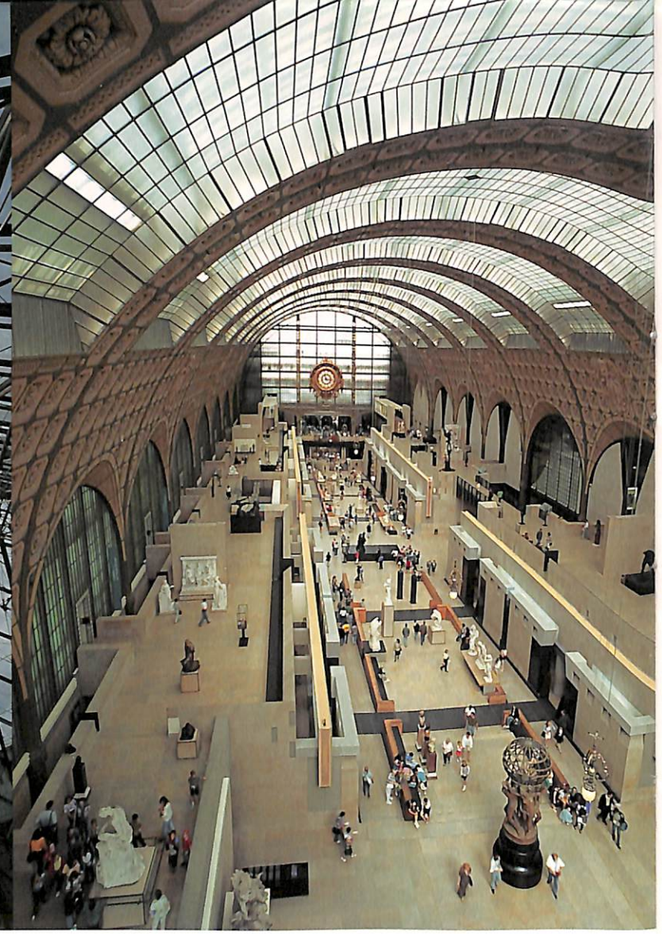
La Défense

上左：ディファンス地区のビジネスエリア
上右：住宅エリアからビジネスエリアへ散歩
中上：グラン・アルシュの西側にはハイウェイがのび、工事中のクレーンが活気を伝える
中下、下左共：ビジネスエリアの奥に広がる高層住宅ゾーン。カラフルな建物はエミール・アイヨー設計の高層住宅群「雲」
下中：高層住宅「雲」の窓は、円やしずく形などユニーク
下右：高層住宅「雲」の前には広々とした公園。ヘビのオブジェは子供たちのすべり台
前頁：黒川紀章設計のパシフィックタワーは、チューブ状の歩道橋でハイウェイをまたぐ







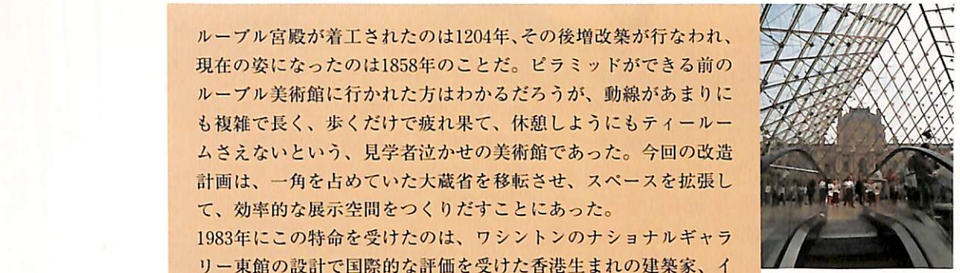


Le Grand Louvre/ Le Musée d'Orsay

甦る歴史の遺産

グラン・プロジェによって誕生した建造物は計9件。いかにもパリらしいのは、9つのうち3つまでが、既存の建物の保存・再生ということだ。それも、ただ保存・修復するのではなく、現代の都市空間にいかに生かしていくのかという視点に立って、卓越した手腕を発揮している。ガラスのピラミッドで話題を呼んだルーブル美術館、19世紀の駅舎を改造したオルセー美術館に、その粋が結実されている。

上左：当時のままの大時計が時を刻み、ここが駅であったことを感じさせる
上右：駅舎に付属していたホテルも復元され、豪華なレストランになった
下：セーヌ川に面して建つオルセー美術館外観
前頁左：ルーブル美術館のガラスのピラミッド。800枚の特注の強化ガラスが使われている
前頁右：オルセー美術館。線路とプラットフォームのあった展示空間は、長さ138mの吹抜けの大空間。改修の設計はACTアルシテクチュール、内部装飾はミラノ出身の女性建築家、ガエ・アウレンティが担当した



ルーブル宮殿が着工されたのは1204年、その後増改築が行なわれ、現在の姿になったのは1858年のことだ。ピラミッドができる前のルーブル美術館に行かれた方はわかるだろうが、動線があまりにも複雑で長く、歩くだけで疲れ果て、休憩しようにもティールームさえないという、見学者泣かせの美術館であった。今回の改造計画は、一角を占めていた大蔵省を移転させ、スペースを拡張して、効率的な展示空間をつくりだすことにあった。

1983年にこの特命を受けたのは、ワシントンのナショナルギャラリー東館の設計で国際的な評価を受けた香港生まれの建築家、イヨー・ミン・ペイである。

彼がつくった改造案は、中庭のナポレオン広場にピラミッドを建設し、ここをエントランスとして地下のホールに導き、コの字形に建つ3つの翼の展示室へつなげるというもの。つまり、ルーブル宮殿に拡張のための増築部分をつけたすのではなく、ルーブル宮殿はそのままにして地下に広大な拡張スペースをつくったのである。唯一、地上に顔を出すエントランス部分を、ガラスのピラミッドにしたのだ。

ペイはこのピラミッドを「既存のルーブル宮に対して最小限のボキャブラリーで建築を語る手段」と語っている。つまり、古典主義様式のルーブル宮殿に調和するのは、純粋幾何学形態のピラミッドしかなかったということだ。ピラミッドに対する賛否両論は一大センセーションを巻き起こしたが、完成してみると、さまざまな議論が杞憂に終わったということが、よくわかる。むしろ、グラン・アルシュの立方体と同じように、明快な純粋形態を置くことで、過去を現在へとつなげる時間軸が見事に浮かび上がってきているのだ。計算されつくしたモニュメント。伝統の都市パリだからこそ可能な時間軸の演出を、ペイは鮮やかな手つきでつくりだしたのだ。

そして、もうひとつは、ルーブルとセーヌ川をはさんで斜め向かいに建つオルセー美術館。1900年のパリ万博に向けて建設されたヴィクター・ラル設計の美しい鉄とガラスの駅舎は、線路とプラットフォームの部分が見事な展示空間に生まれ変わった。

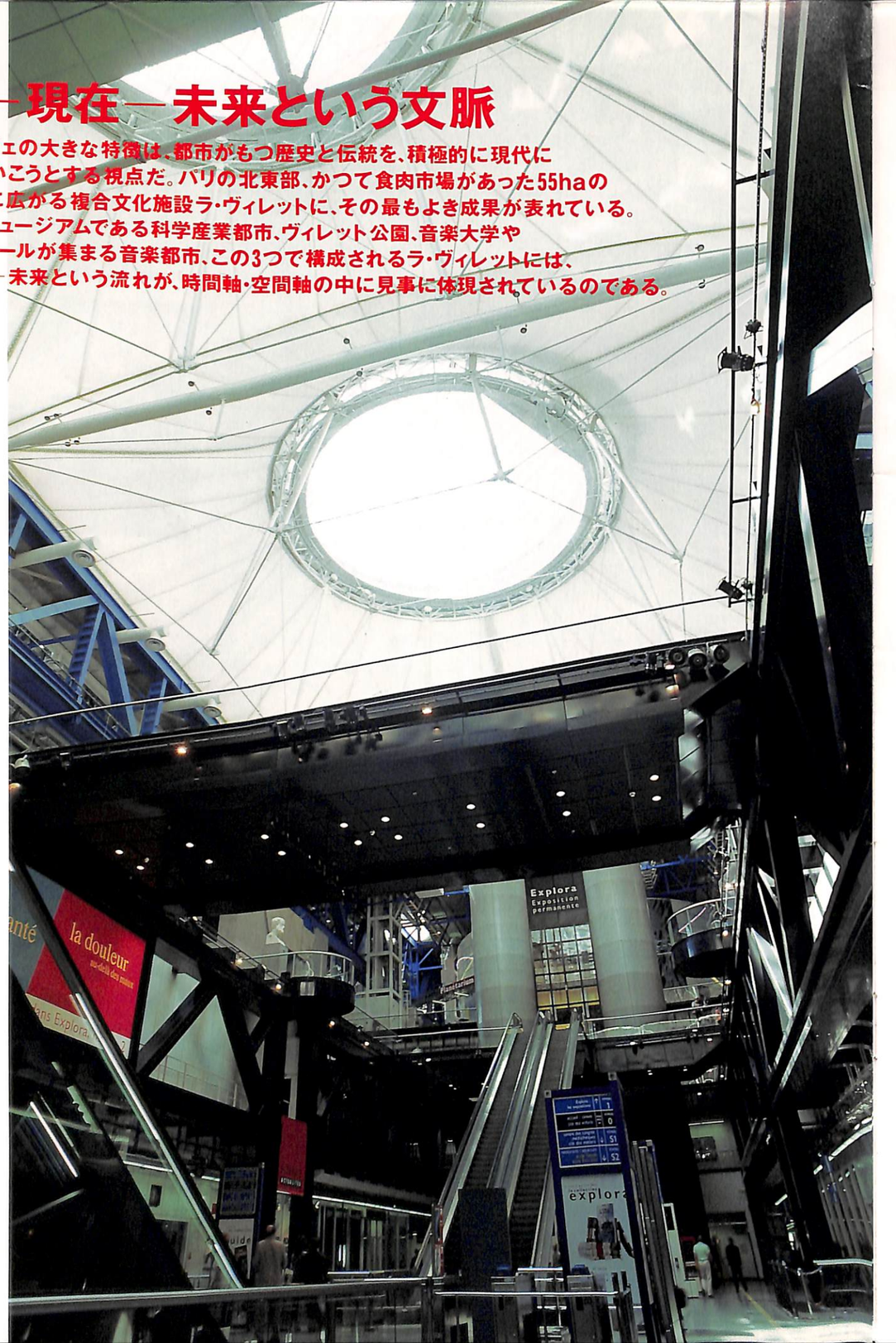
1900年の建物ということは、日本でいえば明治33年。ここで我々はスクラップ・アンド・ビルドの常習犯として、いくつかの例を思い出す必要があるだろう。たとえばフランク・L・ライト設計の帝国ホテルは1923年のものだが、もうすでになく、博物館明治村に移築されてしまった。確かに、壊されずに残りはしたものの、それは記念碑として残したということで、もう完全に過去の遺物になってしまったのだ。現代の都市のなかには、もう生きていない。都市の記憶を刻んできた建物を、捨てさるのではなく、また切り離して保存するのでもなく、現代の都市空間に甦らせること。パリにはそうした確固とした意志が息づいているのだ。

むろん、それは簡単なことではない。技術的にも問題が多いだろう。現にこのオルセーにしても、駅舎を美術館に改修するにあたって、防水・防湿、気密性という、美術館にとって致命的な欠点をクリアなければならなかった。しかし、その努力によって我々は、かつてこの駅舎から旅立っていった人々のざわめきが聞こえてくるような空間で、時の積層が蜃気楼のようにたちのぼるなかで、19世紀美術を鑑賞することの醍醐味を味わうことができるのだ。

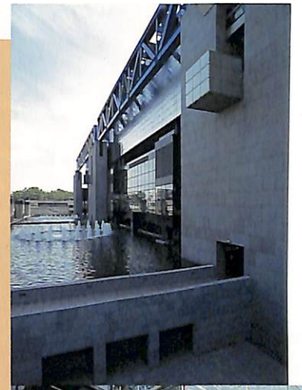
上左：ピラミッドの底辺は35m×35m、高さ20m。傾斜角はエジプトのギザのピラミッドと同じ51度だ
上右：ガラスを磨くお掃除ロボット
中：改造前までは駐車場として使われていたナポレオン広場は、改造後、広場の名にふさわしく人々が集う場所になった
下：ピラミッドの下はエントランスホール

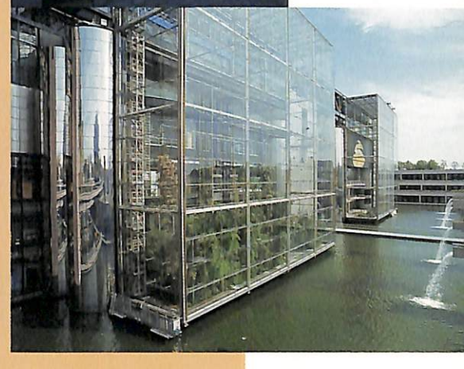
過去―現在―未来という文脈

グラン・プロジェの大きな特徴は、都市がもつ歴史と伝統を、積極的に現代に結びつけていこうとする視点だ。パリの北東部、かつて食肉市場があった55haの広大な敷地に広がる複合文化施設ラ・ヴィレットに、その最もよき成果が表れている。科学技術のミュージアムである科学産業都市、ヴィレット公園、音楽大学やコンサートホールが集まる音楽都市、この3つで構成されるラ・ヴィレットには、過去―現在―未来という流れが、時間軸・空間軸の中に見事に体現されているのである。



左上：「ジェオド」と呼ばれる銀色の球体の内部は、映像ホール。6433枚の三角形の金属フィルムが表面を覆っている
左下：科学産業都市の内部
右上：ファンシルベールの設計コンセプトは「水、光、緑」。建物の周囲を掘り下げて池にし、開放的な空間をつくりあげた
右中：南側に面した温室部分
右下：南側ヴィレット公園から見た科学産業都市の建物
前頁：天井部の直径18mのクーポラから自然光がさしこむ。このクーポラは太陽を追って時間とともに回転するようになっている





ヴィレットの北の玄関口に建つ科学産業都市は、建設途中で放置されたままになっていた家畜の屠殺場を利用して建てられたものだ。オルセー美術館のように壮麗な建物ならまだしも、科学産業都市の場合、保存するほどのすばらしい建物でもなかったのに再生してしまった、ということにまず注目すべきだろう。なにしろ、屠殺場はただ巨大なだけの、鉄とコンクリートの箱でしかなかったのだ。

ところが設計したアドリアン・ファンシルベールは、幅270m、奥行110mの構造体をそっくりそのまま残してしまった。こわして新しく建て直した方が、おそらく安上がりだし、設計だってやりやすいにちがいない。にも関わらず、なぜわざわざ屠殺場を残したのか。

ここには、我々には想像もつかないような、歴史と伝統の都市、パリのこだわりがある。建築という「記念碑」だけではなく、都市が積層させてきた「記憶」をも残していこうとしているのだ。かつてのヴィレットは、運河に薄暗い倉庫が並ぶ食肉市場だった。決して輝かしくはない記憶。血の匂いさえ漂うではないか。しかし、ここがパリ市民の胃袋を満たしていた、まぎれもない場所であることを刻印することで、都市に脈動する生命を吹き込もうとしているのだ。生命体としての都市をつくること。そのための装置としての過去の蘇生…。

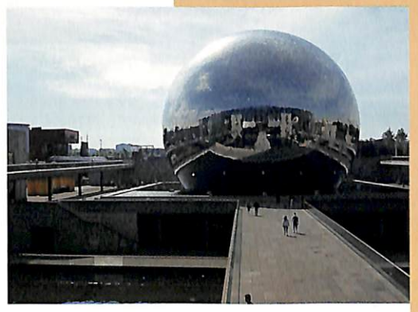
さらにこの科学産業都市の場合、20世紀の建築技術を目に見えるかたちで残そうと、建物の構造を見せる演出を施しているのだ。たとえば、大きな吹抜けの天井には直径18mの回転クーポラ(天窓)があって太陽光がふりそそいでいるが、これを支える材料も見せているし、青い屋根の鉄骨トラスもむき出しのままだ。南側温室のガラスのサッシ構造も見えるようになっている。

「たとえ古くなっても、これが20世紀の建築技術の最高水準であったと誰でもが了解しうるように」見せたのだと、ファンシルベールはある雑誌のインタビューで語っている。

なんという壮大な計画！　未来へ残していくという積極的な意志！　かつての食肉市場、屠殺場の再生、20世紀建築技術の結晶…人々はこうした逸話や物語を語り継ぎ、そこにみずからの思い出や風景も織り込んで、都市に愛着を感じていくのだろう。

そして南側に広がる35haの広大なヴィレット公園は、科学産業都市が提示する過去―現在という時間軸をさらに未来へとつなげている。

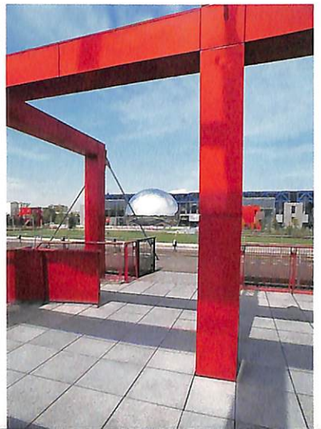
スイスの若手建築家、バーナード・チュミが設計したこの公園は、「点・線・面」によるシスティマティックな構成だ。敷地の東西・南北方向に「線」となる歩道デッキを配し、さらに120m間隔のグリッドで区切った交点に赤いペンキで塗られた抽象的なフォリー(あずまや)を「点」として置き、その間の「面」はテーマパークにするという、きわめてコンセプチュアルなもの。グリーンの芝生に点在する赤いフォリーが規則的なリズムを生み、公園内に復活されたナポレオン時代の運河も、牛の収容施設が再生された多目的ホールも、違和感なくとけこんでいる。この公園の南入り口には、未来的な音楽都市がほぼ完成し、絶妙な間合いで過去と現在、未来がレイアウトされたのである。

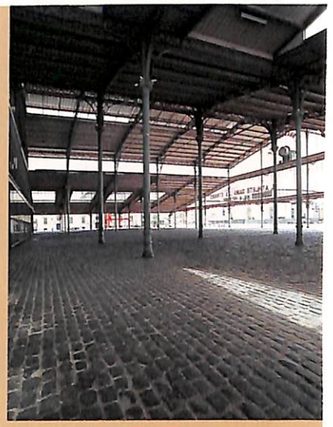


La Villette

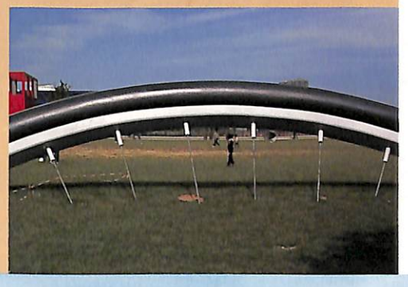
上：公園を設計したのはバーナード・チュミ
下3点共：赤いスチール製のフォリーは、すべて一辺10.4mの正方形を土台にし、さまざまな形状をとっている。レストラン、休憩所など、機能もさまざまだ

La Villette





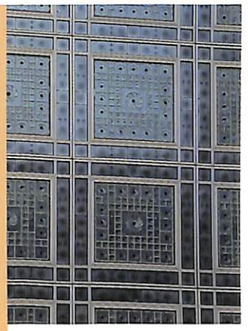
上左右共：6000頭の牛を収容していたグラン・アール。19世紀建築の鉄骨の美しさがそのまま残され、現在は多目的ホールとして利用されている
上から2番目左：公園南側に完成した音楽都市。設計は1944年生まれの新進建築家、クリスチャン・ド・ポルツァンパルク
上から2番目右：公園内には、ナポレオン時代に利用されていた運河も復活した
上から3番目左右共：フォリーで区切られた「面」はテーマパーク。自転車、ドラゴンなど、意表を突いている
下：科学産業都市の南側に広がるヴィレット公園

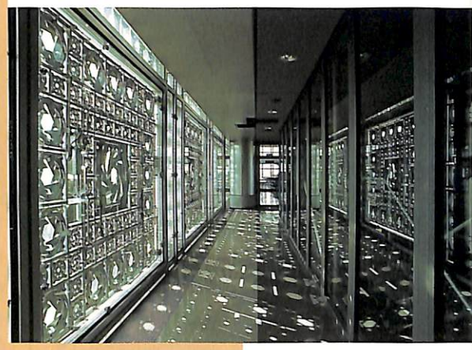


L'Institut du Monde Arabe

異文化を都市に織り込む

**グラン・プロジェとして挙げられている建築計画をみていくと、必ずしも
ビッグプロジェクトや新しいモニュメントの建設ばかりではないということが、
よくわかる。その底流に流れているのは、歴史あるパリを蘇生させるために、
都市の記憶・風景を積極的に活用し、時間軸・空間軸をさらに重層させて
魅力ある都市をつくっていこうという強い意志だ。
再生にかけたパリの叡知は、我々にも大きな問題を投げかけている。**





左上下共：パリ発祥の地として知られるシテ島の近く、セーヌ川とパリ第6大学アルベール・キャンパスにはさまれてアラブ世界研究所は建つ
右上：アラブ世界研究所壁面。1981年の国際コンペで、光の装置をテーマにしたジャン・ヌーベルの設計案が選ばれた
右中：アラビアの幾何学模様をかたどったアルミ・パネルが、美しい光と影を演出する
右下：アルミ・パネルにしかけられた光の絞り装置
前頁：建物中央に配されたエレベーターと階段。ガラス張りの空間には、アラブ的な光の世界が展開する

都市の空間軸・時間軸を見事なまでに錯綜させて都市の活性化をはかろうとしているパリ。ここでもうひとつ、空間軸・時間軸だけでなく、異文化をも都市のなかに織り込み、融合させた試みとして紹介したいのが、アラブ世界研究所である。

アラブ世界研究所は、フランスが6割、アラブ諸国が4割を出資して創設された研究所で、アラブ・イスラム文化の粋を集めた美術館・博物館・図書館機能をもつ建物だ。

建物北側、セーヌ川から眺めると、なんの変哲もない建物だが、南側にまわると、そこに意表をつくファサードが現われる。いちめん金属のパネルで覆われ、それが太陽の光を受けてキラキラと輝いている。金属パネルはよく見ると、アラビアの幾何学模様の集合体なのだ。

正方形、円、星形、多角形といったアラビアの壁面装飾のパターンを引用したアルミパネルが計242枚設置され、なんと2万5000台ものコンピュータで、パネルがカメラの絞りのように開閉するしかけになっている。

内部に入ると、この光の演出は圧倒的な冴えをみせる。幾何学模様のパネルを通してさしこむ光が複雑な陰影模様をつくりだし、いかにもアラブ的な空間をかもしだしているのだ。設計したジャン・ヌーベルにとって、パリ発祥の地とでもいうべきシテ島に近いこの建物は、「伝統と現代」そして「西欧文化とアラブ文化」の融合が重要なテーマであったという。アラブ建築の特徴である光を素材にしながら、ヌーベルはパリに根づく多様な文化を光とともに織りなして建築物に結晶させたのである。

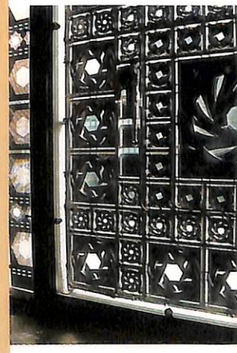
研究所とはいえ、ここには研究者や学生ばかりでなく、一般の人々も数多く訪れる。彼らは幾何学パネルがつくりだす光と影の演出に感嘆の声をあげ、屋上のレストランでエスニック料理を楽しみ、向かいのシテ島のノートルダム寺院や市内を眺めてパリの伝統をかみしめるのだ。重層する時間や空間、さらに異文化まで織り込んだ都市の懐の深さに、人々はパリに生きていることの幸せを、誇らしく思っているにちがいない。

グラン・プロジェは、ときにパリ大改造計画といわれることもあるが、そのひとつひとつは、決して大がかりな規模のものではない。しかし、これほどまでに世界の注目を集めているのは、一連のプロジェクトに、いままでにない都市再生への叡知が秘められているからだ。

我々が、さまざまな記憶や思い出を重層させながら生きているように、都市もまた歴史や風景を積層させて生きてこそ、魅力的な場であり続けることができるのだ。グラン・プロジェにみられる、韻をふんでいるかのような過去の遺産との照合あるいは援用、そこから生まれる物語は、パリという都市の空間的連続性、過去―現在―未来という時間的文脈をつくっていくうえで不可欠のことであったのだ。連続する文脈をつくること。物語を語ること。すなわち都市をメディアとしてとらえることで、過去は過去として葬られることなく、現在も、そして未来へも生きていけるということを、伝統的文化が息づくパリの人々は、いちはやく察知し、行動にうつしたのだ。

パリ再生の物語は、世界の都市に語り継がれていくにちがいない。

参考文献：*Architectures CAPITALES Paris 1979-1989*, Editions du Moniteur, Paris, 1989
松葉一清『パリの奇跡―メディアとしての建築』、講談社現代新書、1990
「建築文化」No.513、彰国社、1989
「日経アーキテクチュア」1989年9月18日号、日経BP社



◎APcom- の内容に関して編集室までご意見をお寄せください。抽選で10名様にパリの組み立て模型をプレゼントいたします。◎

パリのグラン・プロジェを知るキーワード

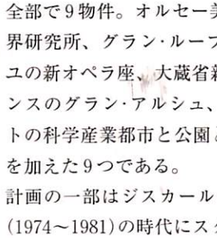
■グラン・プロジェ

グラン・プロジェ(グランド・プロジェクト、大規模計画)と呼ばれている建設計画は、全部で9物件。オルセー美術館、アラブ世界研究所、グラン・ルーブル、バスティーユの新オペラ座、大蔵省新庁舎、ディファンスのグラン・アルシュ、そしてヴィレットの科学産業都市と公園と音楽都市の3つを加えた9つである。

計画の一部はジスカール・デスタン大統領(1974～1981)の時代にスタートしたが、オイルショック以降の景気停滞、保守派のパリ市長シラクの登場によって計画は難航し、完成はすべてミッテラン大統領(1981～)の時代になってから。建築マニア、ミッテランの手腕によって計画が実現したことから、このグラン・プロジェは「大統領のプロジェクト」とも呼ばれている。

■バスティーユの新オペラ座

フランス革命勃発の地、かつて牢獄があったバスティーユに新オペラ座がオープンしたのは、革命200周年の1989年7月14日。上流階級のシンボルであったオペラを、一般大衆のものにするという社会党政権ミッテランの意図によって、このバスティーユが候補地に選ばれた。



新オペラ座は、バスティーユ広場の記念碑「7月のコロン」に面して建つ

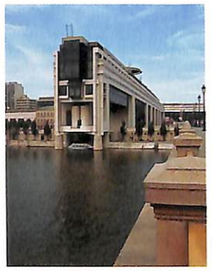
外観は伝統的な石と、現代的なガラスとアルミの組み合わせ

「新」オペラ座に対する「旧」オペラ座は、シャルル・ガルニエが設計した装飾過剰なネオ・バロック様式で、19世紀のオスマンのパリ大改造の目玉ともいえる建造物であった。1世紀後のパリ大規模計画で再びオペラ座が誕生したのが象徴的である。

設計は、コンペで600案のなかから選ばれた、カナダのカルロス・オット。ハイテク技術を駆使して、計9つの舞台装置が収納できるようになっている。

■大蔵省新庁舎

パリ市東部、ベルシー地区に完成した大蔵省新庁舎は、度肝を抜かれるほどに「なが～い」建物である。全長375m、2本の道路をまたがったうえに、片足はなんとセーヌ川に突っ込んでいるのだ。



片足をセーヌ川に突っ込んだ大蔵省新庁舎

この大胆なプランをつくったのは、ポール・シュメトフ、ボルハ・ユイドブロの二人の建築家。開発の遅れた東部地区にインパクトを持たせるために、エッフェル塔とほぼ同じ長さのものを横に寝かせて、棒のように長大な建築物にしたのだという。この「棒」は、すぐ横を走る地下鉄ベルシー線の石造の高架橋を意識した形状でもある。意表を突いたセーヌ川への片足突っ込みは、「水中から立ち上がる日本の鳥居の変形」だそうだ。

セーヌ川の氾濫に備えて、主要なスペースやコンピュータ室を上のレベルに配置するなど、インテリジェントビルとしての装備も配慮されている。

手前のメトロの高架橋を意識して、全長375mもの長い建物に

■ポンピドゥーセンター

グラン・プロジェを成功に導く原動力となったもの、それがこのポンピドゥーセンター(国立現代芸術センター)である。1969年、ポンピドゥー大統領のイニシアティブで計画され、1977年に完成したこの建物が、パリの都市計画の将来を決定したといってもいいだろう。

かつて中央市場があったレ・アールそばの空き地にポンピドゥーセンターが完成した時は、非難ごうごうだった。イタリアのレンゾ・ピアノとイギリスのリチャード・ロジャースがデザインした、むき出しのダクトやエスカレーター、赤・青・緑の原色が、周辺環境にそぐわないという理由からだ。おりしもパリは、文化相アンドレ・マルローが制定したマルロー法によって歴史的環境の保存が義務づけられ、それがすっかり「常識」化した時期であった。高さ20mを越える建物、歴史的まち並みを破壊するような建物は建てない、という暗黙の了解ができあがっていたのである。

エスカレーターが組み込まれた透明チューブはポンピドゥーセンターのシンボル

赤・青・緑の原色を使ったむき出しのダクト

しかしオープンと同時に、批判を覆すかのように、ここはパリの新名所となり、1日の入場者が平均2万人という、美術館としては世界一の記録を保持し続けることになる。ポンピドゥーセンターの成功によって、パリ市民へのコンセンサスが浸透し、グラン・プロジェへの大きな布石が敷かれることになったのである。

■オムニ・スポーツ

国家プロジェクトのグラン・プロジェに触発されて、パリでは市・民間レベルでもさまざまな再開発が行なわれている。以下に紹介する3つはその代表的な例だ。

オムニ・スポーツはパリ市が建設した総合スポーツ施設。ベルシー地区、大蔵省新庁舎と向かい合って建つこの体育館は、ピラミッドのてっぺんを切り取ったような、奇妙な八角形をしている。しかも、斜めになった外壁には、青青とした芝生が植えられていて、未来的古墳といった趣だ。大蔵省新庁舎の「棒」に対して、こちらは「山」。1995年には、セーヌ川の対岸にフランス大図書館が完成する予定で、この一角はパリのランドスケープをまた新たにしそうである。

右：八角形の外観
左：ホンモノの芝生が植えられている外壁

■モンパルナスのコロン

モンパルナスといえば、ベルエポックの時代の芸術家たちのたまり場、というイメージだった。しかし、1970年代に57階建ての不粋なモンパルナス・タワーが出来てから、ここはモダニズムの墓場のような殺風景な場所に変わった。

その汚名を返上したのが、「コロン」(円柱)と呼ばれる集合住宅である。まるでローマかギリシア時代のような巨大な円柱の門、そこを入ると広場を取り囲む円形の建物が、ガラスの円柱を連続させて建っている。

広場を囲む円形の建物

設計したのは、ヒストリシズム(歴史主義)の引用を得意とするスペインの建築家リカルド・ボフィル。迷路のようにいくつもの円形建物が配置された「コロン」は、過去への回帰というよりも、モダニズムが切り捨ててきたロマンティシズムを復権させたかのようである。

左：神殿のような巨大なコロン
右：何本ものガラスの円柱が張り出している

■シトロエン・パーク

パリ15区、郊外に近いセーヌ河畔に出来たシトロエン・パークは、その名のとおり、シトロエン自動車の工場跡地を公園にしたものである。

この公園のコンセプトは「錬金術」。自動車工場、すなわち金属を扱っていた場所だったからだろうか、いかにもパリらしいウィットを感じさせるコンセプトだ。点在する大小9つの温室は、それぞれ鉄、銅、鉛、錫などと名付けられ、あたかも金・銀が精製されて出てくるかのように、水が流れ出るしかけになっている。

上：地面から直接噴き出す噴水は子供たちに大人気
下：大小9つの温室には錬金術に使われた卑金属の名称がついている